

はじめに

「本誌は、徳次郎石研究会（令和元（2019）年5月15日発足）の、引き続き2年目の令和2（2020）年度、の研究と活動の成果を報告するものです。

遡る平成30年（2018年）、「大谷石」の文化が日本遺産に認定され、新たな街づくりの指針が未来に開かれました。これにより町に大谷石の景観・建築物利用等での活力も出てまいりました。同時に、野州（栃木県）全体の失われた石産地（ロストワールド）についても、歴史に埋没されることなく、掘り起こしの機運も生じております。

踏まえて、本年度の徳次郎石研究会の活動について、特筆事柄は次の点です。

1. 調査の対象が、近隣の採石地に及んだことです。

当研究会の調査では、必然的に隣接の採石場にかかわることになります。そこで遭遇することは、採石や文化の違い、産業規模の大きさを思い知らされることになります。同時に、その記録が皆無に等しく、伝承者もない現実に直面いたします。

これは、石文化の研究をする者にとって、一番危惧する所です。村落の民の生活を支えた石の名称はもとより、その事実すら永遠に忘れ去られることになります。石利用は、当然、組成の特徴を利用したものであり、これもまた、科学的に検証されていないようです。これら、文化、地質学などの自然科学の両面に空白を置くことは、社会的にも損失をもたらすと考えられます。

これにつき将来、現在より正確な発掘は、不可能といっても過言でなく、石従事者が亡くなっていく現実からほとんど期待できません。たとえ不十分なりとも、今、野州全体の採石文化の掘り起こしを敢行して、未来に禍根を残さないことが、いわば本会の宿命とも思えます。今回は、徳次郎から西に国本地区、さらに東に豊郷地区の範囲に対象を広げて、考察を行うことといたしました。

2. 次に、今年度の研究の特徴としては、徳次郎石等の景観の評価と、石造蔵などの建物の町づくりへの提言です。

3. 今年度は、宇都宮市市民活動団体応援助成金の交付団体として、市から助成をいただきました。

その時の審査で、産（民）学官連携事業としての位置づけによる、発展についての助言がありました。必ずしも理想通りとはいきませんが、その方向性が見えてきたところです。又、当研究会の活動には、経済的支援の他にPRの機会をいただき、おかげで市民サイドに視野が広がり、今後の弾みとなっております。

今來のパンデミックの時代に接し、集落の民とともにあった徳次郎石文化に、思いをはせることがあります。それは地区内には、江戸初期より実に多くの民間宗教的オブジェの（当会 池田貞夫の調査「富屋の石造文化財年代別一覧」）を目にいたします。その時代にも、徳次郎石に時代を乗り切る、民による精神文化のあったことも思い知らされ、路傍の石に励まされる思いすら致しました。

改めまして、令和2年10月31日の中間発表会にもとづき、令和2年度成果集の定期発刊にいたり、事業の完成を見ましたことをご報告申し上げます。おおくの方々の、ご声援とご期待に、お応えできればと考えております。

本会の成立・運営・執筆にご尽力をいただきました方々に、厚く御礼申し上げます。

地元の方々及びとりわけ宇都宮市富屋地区市民センターにおきましては、展示会の開催等格別のご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

2021（令和3）年3月

徳次郎石研究会 代表幹事 中川 博夫
幹 事 中村 洋一